CASE 3

［福島県］

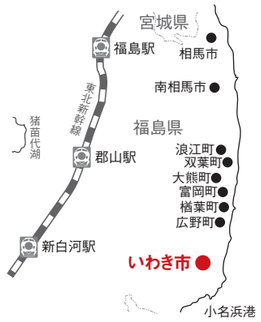
いわき市

まちの復興を信じて「また来てください」

美空ひばりゆかりの地とあって、震災前は年間10万人が訪れた塩屋埼灯台。
市内でも海に近いこの一帯は、いくつもの集落が津波にのまれた。
運よく難を逃れ、いまでも灯台近くで観光業を営む鈴木一好さんは、
生き残った者の務めとして震災の記憶を観光客に伝える。
復興まちづくりにも自ら関わり、早期復興を願って協力を惜しまない。

★以外の写真=菊池 斉　取材・文=谷内信彦

塩屋埼灯台下の道路際に立つ美空ひばりの記念歌碑の前で、震災当時の思いを語る鈴木一好さん



「ここであの人の家が流された、ここであの人が亡くなった……。思い出すと、言葉が途切れることもあります。けれども、自分の体験を伝えていくのが、生き残った者の務めと思って続けています」

いわき市の海辺のまち、薄磯育ちの鈴木一好さんは、その南端に突き出る塩屋埼の県道沿いでドライブイン「山六観光」を経営する。店内には震災直後の写真を展示し、日々訪れる観光客に当時の様子や気持ちを語り部として伝える。

語りは残された者の務め

塩屋埼は、「日本の灯台50選」にも選ばれた灯台が目印。この辺り一帯は、美空ひばりの歌う「みだれ髪」の舞台として広く知られる観光スポットだ。震災前、鈴木さんはこの地でウニ漁に携わりつつ、観光業を営んできた。ドライブインには何十台ものバスが立ち寄り、海の幸を堪能する観光客でにぎわった。

しかし東日本大震災を境に、そんな日々が一変した。塩屋埼をはさんで南北に位置する豊間と薄磯の両集落では、津波によって9割前後の家屋が大きな被害を受けた。

電気や水道の供給がストップする中、鈴木さんは薄磯の地を離れず、近隣で行方不明者が発見されると必ず立ち会い、身元捜索に協力した。「津波にのまれず、家も残った自分は恵まれている。自分にできることはしていく覚悟でした」。

ドライブインを再開させたのは、震災後8カ月近くたってから。再開しようと思えばもう少し早く可能だったが、海岸沿いを通るとつらい記憶がよみがえり、なかなか踏み切れなかった。

それからさらに1年半。鈴木さんは震災当時の話を語り始めるようになった。しかし、思いは複雑だ。「ありのままを話したいと思っていますが、亡くなった方たちの顔が浮かび、つらさのあまり、言葉にできないこともあります。語れるのはまだ、3割くらいです」。

つらさと向き合いながら、「生き残った者の務め」を果たし続ける鈴木さん。その目は、復興後のまちの姿を遠くに見つめる。

被災した薄磯・豊間の両集落では、市から復興まちづくり事業を受託したUR都市機構が高台の造成を進めている。2015年度内には、住宅再建も可能になる。

鈴木さんは復興のスピードを少しでも速めようと、事業を公正に進めるため設置される審議会の委員に自ら手を挙げ、任務に当たっている。事業に不安を抱える知り合いがいれば相談に乗り、復興に向け地元の人同士で話し合えるように、ドライブインの一角を開放するなど、協力を惜しまない。

戻ってくる人が減る心配

「権利者が100人いれば100通りの事情があって、同意に時間がかかることは分かります。しかし、再建できる環境を早くつくらないと、戻ってくる人が減ってしまう。スピードが大事です」

自ら復興まちづくりに取り組む一方で、必要なノウハウを持つ市やUR都市機構にはプロとして信頼を置く。「被災者の意見を取り入れながら、感情に流されることなく、復興まちづくりに向けた計画を作ってくれています」。

UR都市機構いわき復興支援事務所で所長を務める佐藤秀城は、こう明かす。「復興に産業の再生は不可欠です。だからこそ、地元の産業にも関わる鈴木さんはキーパーソンの一人。何度となく通い、まちの将来を本音で語り合って、信頼関係を築いてきました」。

市が音頭を取り、まちの将来を語り合う場もできた。市都市復興推進課の齊藤貴広氏は「昨年9月、薄磯や豊間など地元集落の代表に、市や県、UR都市機構の担当者を加え、市民会議を立ち上げました。将来のまちづくりに関して意見交換を重ねています」と説明する。

鈴木さんは観光客の帰り際、「必ずまた来てくださいね」と、一言付け加えることを忘れない。その言葉には、震災前より魅力ある新しいまちの姿を少しでも早く見てもらいたいという、復興への強い思いがにじみ出る。

店舗の一角にしつらえた震災写真の前で。震災当日、足元に津波が押し寄せる中、撮影したカットも

鈴木さんが経営するドライブイン「山六観光」。現在はおみやげ販売だけ。食堂はまだ再開していない。写真右は、同店名物の「塩饅頭」

「震災を機に新しいまちのあり方を示していきたい」。いわき市都市建設部都市復興推進課技査の齊藤貴広氏は語る

UR都市機構いわき復興支援事務所長の佐藤秀城から事業の進捗を確認（左）。「奇跡のピアノ」の舞台として知られる豊間中学校は、震災遺構として保存するかを現在協議中だ（上）

かつて東北有数の海水浴場としてもにぎわった薄磯地区。震災で地形が変わってしまったが、まちの復興とともに、美しい海岸線も復活させていきたいと地元は願う